

海軍兵学校（江田島）に学ぶ

先日、「先哲に学ぶ」仲間 20 名と、江田島に旧海軍兵学校を訪ねました。

生徒の入学式と卒業式だけに使われる大理石作りの大講堂、幅 144mある赤煉瓦の本校舎が、当時の面影を残し、思わず背筋が伸びる凛として雰囲気がありました。

1888 年（明治 21 年）に開校し、大日本帝国海軍の将校たる士官の養成を目的とした教育機関で、その規模では英国の王立海軍兵学校、米国海軍兵学校と共に、世界三大士官学校の一つに数えられ、全 78 期、総計 12,433 名の卒業生を出しています。

同期は、「貴様と俺」と呼び合い、同級生が戦死した場合は残された家族を生き残った同級生が可能な限り面倒を見るという暗黙の了解が存続したといひます。

この命、何のために使うのか。自らの仕事に全身全霊を打ち込むことは、一人自社の繁栄に留まらず、広く日本の為、日本の国防の一翼を担うことになると確信するからこそ価値があるのではないのでしょうか。

平和ボケした日常から、覚醒を促すために、あるいは、より良い日本を作るためにどう生きるべきか。心ある仲間と現地を訪ね、“大義に殉ずる”とは、どういうことかを再確認させていただきました。

日清・日露の戦いは、日本が世界に飛躍する戦いであり、とりわけ日露戦争は、有色人種が白色人種に勝った人類史上初の快挙でありました。

大東亜戦争は、A B C D 網で生命線の油を断たれ、我慢に我慢を重ね、やむにやまれず無謀と知りつつ戦争に突入しました。“大東亜戦争”が日本の正式呼称で、「太平洋戦争」という呼称は、戦後アメリカが自らの正義を主張するため変更したもの。

いずれにしても、国を守り、子孫を守り、掛け替えのない日本の皇室を守り、次の世代が、豊かで幸せにと願って、先人たちは戦ってくれたのです。

戦後GHQにより、日本だけが残虐で、幼稚で、狂気であったと無残にも断罪されたのです。戦争は、最終的外交手段であり、双方に主張があるのは当然です。「WGIP」により洗脳され、コミンテルンや、戦後利得者と言われる連中が、自虐史観に乗り売国的言動を撒き散らしました。朝日新聞やNHKも同罪です。

現在の日本は、自分の国は自分たちで守るといふ、世界共通の価値観さえ自ら否定し、ただ「平和憲法を守れ」と、世界でも最も奇異な人々に乗っ取られています。

今こそ、正しい歴史観と、日本人としての誇りと自信を取り戻して参りましょう。

それが、先の戦争で尊い命を国の為捧げて下さった英霊への恩返しです。

同時に、次世代を担う子供たち、孫たちに、ようやくまっすぐ顔向けができます。

社長、仕事観・人生観・死生観を確立し、正々堂々の人生を、共に歩んで参りましょう。



今月のポイント

日本の国防の一翼を担うこと